

アメリカ禪仏教のこと覚え書き

IV

—ZCNYの活動と展望—

島崎 義孝

はじめに

一九八七年四月下旬、筆者はスカラシップの留学僧として、当時まだリバーディール（Riverdale）にあつたゼン・コミュニティ・オブ・ニューヨーク（以下、ZCNYと略す）を初めて訪れた。以後、同年六月から十一月にかけてのおよそ半年間を最长に、昨年の夏まで数回にわたり長短の滞在をくりかえしている。この間、ヨーロッパでの接心も含め、他のゼン・グルー

普でも生活し、それらについてはすでに何回かにわたって自分の所感や観察をつづってきた。そうしたなかでZCNYは筆者にとってもつとも親しいグループのひとつであり、また報告を書く機会はいくらもあつたし、そのつもりでもいたがどういうわけか何もせずに今日に至ってしまった。その理由はZCNYの活動をどう評価するかという点にかかわってくるが、後にも述べるように、このグループがきわめて著しいテンポで変化しており、評価などという悠長

な作業をしているうちにどんどん新しい試みに着手、展開させていることにあるのは間違いない。実際、間欠的にZ C N Yを訪れる度ごとに所在場所、活動内容、人員構成が異なっているのに驚かされる。ニューヨークというアメリカでもおそらく最も動きの激しい土地柄にあるとはいえ、Z C N Yの様変わりのはやさはまさに異例といってよからう。そしてこうした激しい変化のなかで、日本社会であればとうてい実行不可能と思われるさまざまなもの（実験）が行われているが、同時に斬新さあるいは展開のはやさそのものから来る多くの問題を孕んでいることも事実のようである。

前回のレポートで私は、歴史のあさいアメリカの仏教グループでは指導者の占める比重がきわめて大きいことを指摘したが、Z C N Yはその最も顕著な例であるといえよう。まず、第一に当初からこのグループには、アメリカ独自の

仏教、あるいはゼンの修行形態や組織はいかにして可能かという志向が強く伺われる。この点については、日本のいわゆる在家といわれる人々よりも宗門人にとって、むしろ理解の及びがたいところがあるのでないかと思うことがしばしばある。日本の宗門人は今日では大半が世襲を行つてゐるため、寺院とか宗門を外側から批判的・客観的に見るという態度を残念ながらほとんどもちあわせていない。すでにできあがつてしまつた伝統への固着がかえつて、新たに生じてくる現象を無視したり、無闇に拒絶するという態度としてあらわれてくるのである。とりわけZ C N Yのような展開を見せてゐる集団は、ゼン・グループとはいえにわかには同調しがたい点も多分にあろう。このことは最初にふまえておかねばならぬ点であろう。

十年間に三度も所在地を移している——この事実だけをとつてみてもZ C N Yの変化のはや

さを窺うことができるが、小文はZCNYの活動内容の変化を明確にするため年代を追って観察してみたい。場所の移動はZCNYのばあい、同時に「坐禅」→「ベーカリー」→「ソーシャル・アクション」というプラクティスの重点移動である。ZCNYの当初からの特色は、他のグループが基本的にいえば坐禅を強調し、多少の差異があるにしても、ゼン・グループとしての性格を一貫して明らかにしてきたのとは対照的に、必ずしも坐禅のみをとりあげていな。彼等は活動の基盤として「五智如来」のイメージを借用し、コミュニティの修行生活を五つに分類して、これらを相互に関係づけた。「坐禅」「社会福祉活動」「学習」「超宗派」「人生」の五つである。知られているごとく

大日如来が法界体性智を現すように、他の如来はそれぞれ大円鏡智・平等性智・妙觀察智・成所作智に対応している。五智はすべて菩薩の悟りの智慧であって、ZCNYはプラクティスを生活全体にわたって徹底化させようとしたといえよう。それはゼンといえば事実上、坐禅のみが行われて、内容が日常生活のなかで血肉化していくことが多い、という反省からきているらしい。

いずれにせよZCNYの活動は、先に述べた三段階にわたるプラクティスの重点移動、あるいは本拠地の移動を縦糸とし、五智如来の曼陀羅を横糸として織りなされてきたということができるだろう。

「五智如来」は大日如来を中心として周囲を阿闍・宝生・阿弥陀・釈迦の各如来がとりかこむ金剛界の曼陀羅によつて示されるが、「五智」は

ZCLA（ゼン・セントラ・オブ・ロサンゼルス）を発つた一行十人が自家用車やトラック

I

を連ね、はるばるアメリカ大陸をニューヨークまでたどりついたのは一九七九年のことである。ブロンクス区の一画、リバディールのモシユルー (Moshulu) 通りにZ C N Yは最初のセンターを設けた。二階建のアパートで、地上階は店舗があつたが、Z C N Yは禅堂と事務所を同階に開き、上階をメンバーの居室として使つたという。

グレイストン (Greyston) を購入したのはそれから間もなくのことである。私が初めて訪れたときのZ C N Yである。ハドソン川とその対岸に屏風をたてたように切りたつた絶崖を眼下に臨む高台のマンションで、二エーカーの芝生の庭が川までなだらかに延びている。この建物はもともとドッヂ家の夏季の別荘で、一八六三年の建造になることが玄関横のプレートに示されている。ワシントンのスマソニアン学術協会やニューヨークの聖パトリックを手がけたジェ



現在のZ C N Y付近の風景・ハドソン河を臨む(対岸はニュー・ジャージー州)

イムス・レンヴィークという著名な建築家の設計
というが、どつしりとした誠に重厚な構えである。コロンビア大学のティーチャーズ・カレッジからの購入だが、六〇万ドルという大金の工面が徒手空拳のZ C N Yにどうしてついたのか。しかもモスロー通りのアパート借入から僅か二ヶ月後のことだという。当時、中道を行くべき仏教のグループがぜいたくな買い物をするべきではないという相当強い反対意見がメンバーのなかにはあつた。しかし、この高価な出費をけつきよく決心させたのはニューヨークといふ大都市を活動の場として擁するZ C N Yが、将来の展開を見越してどうしても確保すべき施設だという判断があつたからだろう。事実、ゆつたりとしたスペースをもつグレイストンの建物はマンハッタンから交通手段を使つて三〇分という至近距離にあり、しかもさながら山中のような閑寂な一帯で、以後多くのニューヨーカ

ーが静修や各種ワークショッピングに頻繁に参加することになる。この時期にはとうじの通信記録をみると十二ヶ月間に二三回もの接心が行われている。おそらくZ C N Yが最もよく「坐つた」時期だろう。

Z C N Yが最初の生計活動をはじめたのは一九八一年になつてからである。それまではメンバーが各人に適当な仕事を見つけて、収入のいくらかずつを出し合つて、センターの維持にあてるなどしていだらしい。はじめての生計活動というのは同じリバディールにあるヨット・クラブの場内食料売場の経営である。これは言うまでもなく共同体維持のための企てであるが、ここで活動を通じて地域の中上流階層の人々にZ C N Yの存在を知らしめ、多くの協賛者や寄付を得たことは後の展開のためにはまさに好都合だつたといえよう。彼等のなかには新たにZ C N Yのメンバーになつたものもい

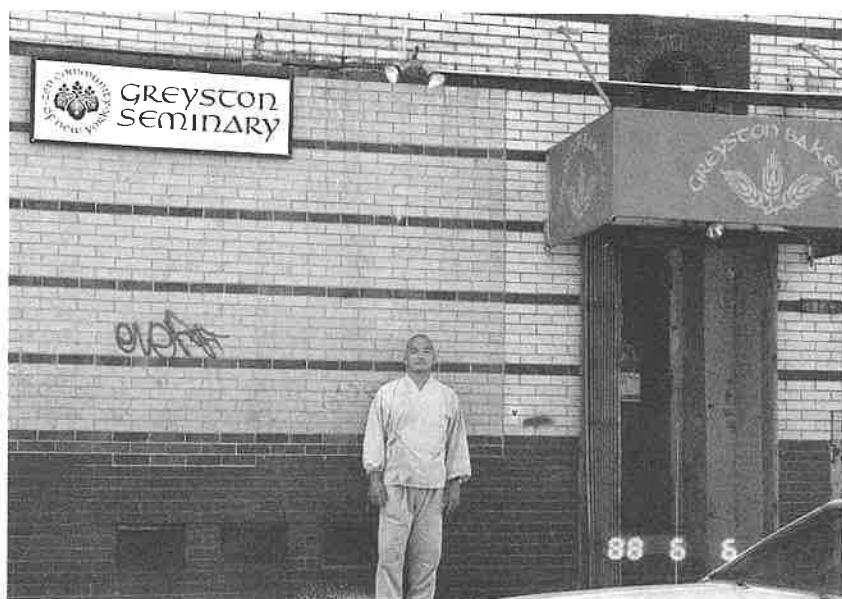
た。そしてついに百名を越える数に達するが、しだいにコミュニティをより安定した永続的なものにするために経済基盤を確立することが吃緊の課題として考えられるようになつた。ベーカリーの設立である。

いつたい、六十年代のいわゆる対抗文化の時代に、ヘゼンの爆発^{ハーフティス}といわれる現象があり、アメリカ人の多くの青年層がさまざまなレベルでこれに関与したが、そうした時期を経て八十年代にはアメリカ人のなかからゼン・グループの指導者が現れはじめた。Z C N Yはその一例だが、特徴的なのは東洋からやつてきた指導者たちが専ら坐禅を強調し、またこだわり続けたのとは対照的に、アメリカ人の指導者は基本的にもちろん坐禅を主軸に据えるものの、必ずしもそれに限定しない。いわゆるアートや社会活動まで修行に數えあげていることがあり、とりわけ積極的な営利活動に手を染めているのは

日本からのゼンの指導者には見られない着想であろう。その草分け的な存在がサンフランシスコ・ゼン・センターのタサハラ・ベーカリー、グリーン・レストラン、農場、温泉避暑地など の多角経営である。これらの仕事に携わることはワーカー・プラクティスつまり作務だが、少なからぬ収益をあげることによつて当該グループの運用には多大の貢献をなしている。Z C N Yがグレイストン・ベーカリーを創業したのは一九八二年、ヨットクラブとの契約が終わつた直後である。数名のメンバーがサンフランシスコ・ゼン・センターにパン、ケーキの製造技術習得のために派遣され、一方、グレイストンでは器具の購入・市場調査・セールスのために残つた人々が奔走した。ブルーミングデイルズ、グーゲンハイム美術館、世界貿易センターなど著名なホテルや公共施設のカフェテリアやレストランあたりから注文をとりつけたそうで、市

場開拓にずいぶん努力したにちがいない。その年のクリスマスにはすでに本格的な商戦に入っていたというから、このあたりからもZ C N Yの活動テンポのはやさが伺えようというものだ。おそらくたしかな手応えがあつたのである、グレイストンの台所はベーカリーとしては間にあわせて手狭であつたから、リバディールから約五キロ北上したヤンカース (Yonkers) 市にベーカリーを移した。ウッドウォース (Woodworth) 通りにあるこの赤レンガの三階建は当初ほとんど廃屋に等しい状態だったといふが、献身的な彼等の作業によつて修復された。

ところで、右のようなZ C N Yの展開の仕方に対する賛否両論があつた。反対意見はベーキングがゼンであるわけがないし、金持ちの美食家を楽しませるつもりはないというもので、この種の考えをもつ人たちはZ C N Yを去つた。



グレイストン・ベーカリー正面で(筆者)



グレイストン・セミナリーの正面

グレイストン・セミナリー遠景



かと思えばベーキングに興味をもつて、観念ではない現実世界のゼンの修行だと考えてやつて来る人々もあつた。何か新しいことを始めるたびどとにある人々が去り、ある人々がやつて来る——このパターンがZ C N Yではきわめてはつきりしているように思われる。

翌八三年には事務所をモスロー通りに再び移している。これからしばらくの間、Z C N Yの活動は三ヶ所で行われることになる。ヤンカースの工場で作られた製品は、モスロー通りの事務所に隣接するカフェテリアで販売された。詩や童話の朗読、写真の展覧会がしばしばここで催され、とくに日曜日の夜には各種各地域・時代の音楽演奏があり、リバディールの住民も共にこれを楽しんだという。Z C N Yメンバーが一五〇人を越えたのはこの時期で、以後メンバーは着実に業績をのばし、並行してグレイストン

では各種セミナリーがさかんに行われていた。

おそらくこの時期のZ C N Yがもしごく一般的な人間の日常生活という点からみれば、最もバランスがよく保たれていたのではないか。

多少の不満や感情的な齟齬があつたとしてもメンバーの最大公約数的な満足を得ていたはずである。八二年にはZ C N Yの指導者であるバーナード・グラスマン (Bernard Glassman) 師の晋山式が行われた。

ここで同師について少し紙幅を費やしておく必要があるだろう。グラスマン師は一九二九年、ニューヨーク市ブルックリンの生まれのユダヤ系アメリカ人で、女ばかりの姉妹に最後の男子として生まれた。NY市内の大学で宇宙工学を学んだのちは、ロサンゼルスの航空会社ダグラス社の技師として働くかたわら夜間はUCLA (カリフォルニア大学ロサンゼルス校) で数学を専攻、哲学博士の学位をもつ。また、若年か

ら宗教的方面にも関心が深く、長するにおよん
で様々な宗教書に接した。Z C N Y がヘマンダ
ラのひとつに超宗派を数えているのは、主管
である彼の精神的遍歴に負うてゐるところが大
きい。しだいに仏教書、とりわけ禪に関する書
物に親しむようになり、『甘露門』には最も馴染
んだという。共同体生活にも興味をもち、大学
卒業のちイスラエルに赴きキブツに入った経
験があるが、結局ここは性格にあわずアメリカ
へひき返した。だが、この経験が後年、自らの
理想とする共同体をつくるさいに有形無形の手
がかりを彼に与えたであろうことは言うまでも
ない。いわゆるゼンとのかかわりは書物を通じ
て坐禅の独修を行つたことに始まるらしい。『禪
の三柱』（一九六五）は安谷白雲老師が欧米人の
ために述べたゼンの紹介をフイリップ・カプロ
ー師が米訳した書物で、今日でも多くの人々に
親しまれているが、彼のばあいもそうであつた。

同書出版の二年後、ロサンゼルス神智会で安谷
老師の警咳にはじめて接した。その折、通訳を
つとめたのが後年、Z C L A（仏真寺）を創設
する前角師で、三師弟の仮縁がここに開いたと
いうべきだろう。爾來参禪を続け、一九七〇年
に得度する。このころ職を辞し、家族ともども
Z C L Aに移り住んでプラクティスに専念す
る。七〇年は前角師が芋坂光龍老師を招じてZ
C L Aで摂心を行い、グラスマン師はそこで精
神上的一大転機を迎えたという記事が、ピータ
ー・マシスン氏の著書『九頭龍川』（一
九八六）に見える。そして、七六年には臨済宗
で行う公案の修行にひと区切りがついたとい
う。Z C L Aで前角老師の右腕として活躍する
ようになつたが、このセンターでメンバー数が
急速に増加してゐるところいろいろな事業、たと
えば地域住民のための診療所をはじめ、建築・
造園・縫製・配管などを始めたのは主としてグ

ラスマン師の発想になるのではないだろうか。

とりわけ診療所の開設などはその感が深い。

こうして七九年のZCNYへと続くわけである。

II

「五智如来」のうちZCNYの活動の中心がグレイストン・セミナリーにあつた時期には、^{学習}「超宗派」も重要な要素であった。この二つは後にはしだいに比重を低下させていくか、少なくとも表面からは姿を消していくようになる。

「学習プログラム」は一九八〇年に開始される。このプログラムは主に教典を使つての諸宗教の教理の学習だが、そなへかりではなく散文、詩、哲学、心理療法の勉強会が含まれた。メンバーのうちそれぞれの専門家が講師になるといふもじまわり式の学習である。諸宗教とは仏教

は言うに及ばず、キリスト教、ユダヤ教の新旧のバイブルが中心となる。仏教のテキストのなかには上座部の經典とされる『清淨道論(Visudhimagga)』やチベット仏教の『ミラレーパ十萬偈(The 100,000 Songs of Milarepa)』、あるいはわれわれにも馴染みの『法華經』や『正法眼藏』がある。八一年には曹洞宗で用いられる基本的なテキストについてのセミナーがもたらされた。「般若心經」「參同契」「十牛図」「八大人覺(道元著)」「宝鏡三昧」などがそれである。この年には週末や一週間の静修^{リトリート}が一二三回開かれているが、ZCNYの十年を通じてセミナーの最も盛んな時期であろう。そして翌八三年に最初の「超宗派静修」が行われ、主管のグラスマン師をはじめユダヤ教のラヴィ、キリスト教の神父が交替でリトリートを指導し始めた。ワーカープラクティスがそれと並行して行われ、行動のなかの瞑想がベーカリーやセミナリーで静

修の一部として意識的に組み込まれる。

教えることも大切なプラクティスのひとつ、
というのは永年、学校の教壇に立つてから禅の
師家になつた安谷白雲老師のやり方だと仄聞す
るが、こうした方法の是々非々はともかくとし
てそれは前角老師、グラスマン師も踏襲し、Z
CNYのセミナーではある程度経験のあるメン
バーに静修を指導させている。こうした方法が
採用された客観的な理由は、しかるべき指導者
数の絶対的な不足に求められるであろう。八四
年のヘ ^{ビギナーズ・マインド} 初心クラス／がその始まりで、日本
の禅門にはないやり方だと思われる。

学習プログラムはみられるようくへ超宗派／
と表裏の関係にあつた。筆者がはじめてZCNY
を訪れたときには一日のスケジュールが、宗
教グループらしく綿密に実行されていた。早朝
二炷の坐禅のあと、^{サーキス・ホール} 佛間で朝課、おわつて日
天作務、朝食、そしてベーカリーへ出勤、夕方

にまた坐禅という具合で、日曜日には各ワーク
ショッピングを開かれていた。朝のサーヴィスの後、
円陣を組んで何かの文句を唱え、皆で黙禱する
姿をしばしばみかけたものである。

III

ところで、グラスマン師によれば、作務とか
動中の坐禅というのはしばしば人が口にするに
もかかわらず日本などではそれほど真剣には捉
えられてはこなかつたという。彼じしんの考え
には作務という行為のなかにも坐禅と寸分ちが
わないものがある、いやむしろそのなかでこそ
真の坐禅というべきものがあるという信念があ
るらしい。ベーカリーを開設して以後とくにこ
の傾向が強く、彼はたびたび語つてゐる。

「われわれはどこにいたとしてもそこが禅堂
である。たいてい禅堂は特別な場所だと考えて
いるし、それはまことにその通りだ。そこで何

か特別なことをしようとし、精神を集中し、静寂にしようとするが、いつたん禅堂を離れるとまた心がザワつく。要するにわれわれは世界全体を禅堂とは見ていないのである。事实上それは無理で、休息も必要だ。だからわれわれは特別に設けられた場所や修行期間を必要とするのである。しかし、ほんとうは毎日が特別な日であり、どの場所もそのままで特別な場所である。ゼンは動かないこと、ではない。坐禅は不動にあらず。坐ることは行為のまつだなかで集中化された、力強い心身の姿勢なのである。少しでもバランスをくずせば、ゆらぐ。だから安定するためには強い集中力と敏速な動きが必要不可欠である。」

同師が言うように全力で回転しているコマは軸がたつていて、静止しているように見える。コマがすむ、というのがそれであるが、彼のこの坐禅觀はそのまま彼の人生觀でもあるようだ。

八三年までには新しいメンバーはグレイストンには住めなくなつた。さしもの豪邸も二五人ぐらいが居住数の限界だからである。ある人々は周辺のアパートなどに住んで朝晩の坐禅やその他の行事に通つた。居住メンバーはヘセミナープログラムの参加者という身分で、これらの人々はZ C N Y のすべての生活日程を消化することになつていた。コミュニティ内での仕事・同室者との共同・掃除・食器洗い当番にいたるまでの割りあて、他に坐禅、各学習クラスの参加。さらに通常の勤労者のごとく、朝は決まった時刻にベーカリーに『出勤』し事務や製造に携わつた。もちろんこれらはすべてプログラミスである。ベーカリーはクリスマスシーデンなどにはほとんど忙殺といつていいくらい、早朝から深夜まで連日の長時間労働になる。なにかにはこれはゼンなどではないと言つてZ C N Y を離れる人も少なからずあつた。居住メンバ

一は食事と部屋の他に、月額百ドルが支給されている。もちろんこれは大人の小遣いにも満たない少額であつて、生活をカバーできるわけではない。他に扶養家族手あて（ただしこれは乳幼児のみ）、治療費、被服費、休暇のさいの手あてが若干与えられるだけで、ベーカリーを本格的に開始する前のヘゼン・ヒルトンなどといふゆつたりとした気分はなくなってしまった。こうした展開にしたがつて一種の分離がZ C N Yにひろまつた。つまり主管であるグラスマン師の関心がベーカリー経営の方に移るようになり、非居住メンバーがコミュニティとの疎縁感をつのらせていったのである。ベーカリーのみがいわばプラクティスの場所になつて、Z C N Yで学ぶことはグラスマン主義でありゼンではないという不満とも称賛ともつかない感情を抱く人が数多く現われるのである。このあたりがアメリカの禅仏教の強みであり、同時に弱みと

もいえる。伝統がないかわりに自由な裁量が可能だが、それに伴うリスクも大きい。グラスマン師はベーカリー・ビジネスに傾注し、強気の経営を展開することになる。じじつベーカリーを始めた上四半期に売上げの見込みの二倍売つた。その時期にはベーカリーの建物買いとりとグレイストンのローンがそれぞれ一七万五千ドルあつたという。少なくない負債だが、八六年にZ C N Yとして赤字はなくなつた。歳出六五万ドルに対して、五〇万ドルをベーカリー収入、他は会費、プログラムからの入金、寄附で補われた。ベーカリーはその後も順調にのびつづけ、八七年に六三万ドル、八八年に九〇万ドル、そして次に述べるソーシャルアクションの一環として大手のアイスクリーム会社との提携があり、八九年には軽く百万ドルを超す収入をあげた。ある資料によるとアメリカ社会における新規事業は、四社のうち一社は最初の二年間に失

敗し、六〇%は六年目の創業記念日を迎える前に消え去っているというが、ZCNYの場合はうまくいた例のひとつである。こうしてZCNY、より正確にはグラスマン師はベーカリー経営によって大きな自信をつけたと言つていいだろう。

IV

さて、ZCNYの掲げる「五智如来」の最後の要因は社会福祉活動だが、実は「五如来宝号招請陀羅尼」は「甘露門」に含まれているのであって、「甘露門」の思想の実践、つまりソーシャル・アクションこそがグラスマン師の当初からのねらいであつたと思われる。この点が「ゼン」に心をよせる多くの人々に「グラスマンは何をやろうとしているのかわからない」と考えさせる事由のひとつであろう。「ゼン」といえば坐禅というのが、欧米社会でも通念になつてい

るからである。しかし、これは誠に興味深い実験であつて、わが国ではふつう禪の特質を、幽玄・静寂・簡潔・わび・さびなどとしているがZCNYのやり方は明らかにこうした態度に対する挑戦だと私は部分的には受けとつていて、宗教の社会的機能としてしばしば秩序の維持とこれとは逆に、秩序の突破^{ブレイクスルー}といふことがいわれるが、日本の禅宗史などは讀んでいると時代が下るにしたがつてどちらかといえば跳動感に欠け、自然愛好的になつてゐるといえなくもない。因襲と伝統に幾重にも覆われまったく守勢にたつて、伝統を誠の意味で生かし切れていない日本の宗門がこうしたアメリカン・ゼンの態度に学ぶべき点は決して少なくはないはずである。

現在のZCNYはホームレス問題に多大の力を尽しているが、ごく初期から小規模ながら似たような活動を行つてゐる。毎日、正午には食

事中であれ、会議中であれ、あるいは接心中であれ、世界平和を祈念して一分間の默想をしていたことがある。ベーカリーを始めてからは、売れ残りや余剰製品を近在の無料食堂(スープキッチン)に寄附したり、教会やその他の慈善組織に供出した。地域的にもリバデイール公園清掃クラブなどに積極的に参加した。そしてベーカリー経営がいよいよ軌道にのり、Z C N Y の資金基盤とトレーニングの場が確保されるによんで、近隣社会へどのように貢献するかが具体的な活動課題として俎上にのぼるようになったのである。こうした一連の過程はゼン・コミュニティの概念をヤンカースという小都市の地域社会(コミュニティ)にまで拡大しようとしたと考えることができるであろう。

Z C N Y 創立五年目頃ひとりのメンバーによつて書かれたレポートには、診療所・ホスピス・老人保養所ならびに介護施設などの開設が目標として考えていたが、いずれも地域社会で

の活動である。Z C N Y にとつて地域社会はプログラクテイスの場であり、「普廻向」つまり「願わくはこの功德をもつて普く衆生に及し、我等と衆生と共に仏道を成せん」を現実化すべき所であつたのだ。

さて、依然としてアメリカは最も富める国のひとつであることに間違いはないが、この社会においても貧困は今日でも大きな社会問題のひとつであることにかわりはない。いささか意外の感もあるが、他の諸国と同じようにアメリカの社会福祉事業は開拓時代からの貧困問題を軸に発達してきたといえる。一九六四年にはジョンソン大統領政権下で「貧困戦争」宣言がなされ、この前後に社会保障法改正(六二一年)「老人医療保健法」「連邦職業リハビリテーション法」(いずれも六五年)など一連の進歩的な貧困対策法案が成立した。そして現在、公的な発表(米

「国の賃金所得と貧困状態一九八八」米国商務省
国勢調査局・一九八九年十月によれば、アメリカ政府の認める貧困水準（四人家族で年収一二、〇九一ドル）以下の生活を強いられている人々が三一九〇万人（全人口比で一三・一%）にものぼり、とりわけ黒人や母子家庭で貧困が増大している。そのうち黒人、ついでスペイン語系の人々の貧困が白人の三倍から二・五倍。母子家庭の四五%が貧困水準以下、とりわけ黒人の母子家庭ではおよそ六〇%が水準以下にある。貧困状態にある人のうちおよそ二、三百万人がホームレス、つまり文字通り「家のない人々」であつて、日本の新聞でも冬場しばしば報じられているように、多くの人々が街路や駅の構内での生活を余儀なくされている。貧困者の都市流入→税金の高騰、治安の悪化→富裕層の郊外脱出→都市のスラム化という悪循環のために、ニューヨーク市の財政が破綻した

というニュースはわが国でも数年前に知られている。しかも貧困だけではない。それに絡んで強盗・窃盗・麻薬・売春などおよそ一切の社会病理的現象も多発していると言われている。これらの直接、間接の原因を貧困に求めるのもあながち見当ちがいではあるまい。アメリカにおいても貧困の問題はそれほど大きい。

グレイストン・ベーカリーのあるヤンカース市は歴史的にニューヨークへの労働力の供給地であったが、小規模ながらスラム化がすすみ、近年には都市としての活力が急速に低下し、中心部のさびれ具合は往年を知る人には目を覆うばかりだという。ここでもレーガン、ブッシュ政権の軍事費拡大、それに伴う社会福祉予算の削減を批判する声は強い。

ひとくちに「ホームレス」といつてもその内容は様々であり、老人・子供・独身成人・幼児をかかえた独身の母親・精神疾患・身体障害、

あるいはその両方をもつ人々などに分類されている。また、なかにはホームレスとしての生活を敢えて選択する人々もいると仄聞する。彼等に対し細かな措置が考えられているが、人権問題などもあって、実際の対応は容易ではなさそうだ。調査によればヤンカースには少なくとも、一三三三にのぼるホームレス家族があり（一九八七年三月）、彼等は同市の北方、ウエストチエスター郡内のモーテルに雑居していると見られている。しかし、彼らの大半はしばしば移動するので実態は把握しがたいという。子供は通常に交通機関を使うため、多大の出費と時間を費やさざるをえない。母子ともに慣れ親しみ、また住宅や職業を見つけるのに有利な近隣社会から遠ざかってしまうという結果になってしまっている。

一方、同郡には大半がヤンカース市からと見られるおよそ九〇〇人と推定される独身成人の

ホームレスがいる。Z C N Y は幾つにも分類されるホームレスのなかで、民間グループにも比較的容易に取り組み可能と思われる右の二つの種類のホームレス救済を、ヤンカース市という地域共同体の活性化のなかで果たそうと考えた。その中心機関となるのがグレイストン・ファミリー・イン (Greyston Family Inn、以下 G F I と略す) で、八六年の設立になる。Z C N Y とは別の非営利組織であるが、ホームレス・プロジェクトについては政府、州、市などの行政機関からの補助を見込んでいるので、政教分離の原則からこのような措置がとられたのである。ヘゼン・コミュニティといつた一般には決してよく知られていない名称をばかかつたからでもあろう。じつさいこうした手続きを経ることによつてプロジェクト自体の間口が拡がつたことは確かで、行政機関との連絡はとりやすくなり、また、いわゆるゼンに关心のある人

ばかりでなく、ホームレス問題になんらかの貢献をしようとしている一般の人々にも近づきやすくなつたと考えられる。

プロジェクトの当初の計画は、ベーカリーから至近にあるヤンカー市の廃校（元は小学校）の建物・敷地を譲りうけてGFIの本拠をおき、ここを母子および成人男子のホームレスの生活指導の場とし、ベーカリーではベーキングの職業指導を行おうというものだつた。けつきよく

このプロジェクトは積極的な協力者だつた現役市長アンジエロ・マルティネリが、八七年秋の市長選で落選するという思わぬ出来事のために頓挫してしまつた。プロジェクトにかかる人々からは、ヤンカース市長十余年の実績から当選は確実視されており、選挙に先だつ僅か数週間前、ニューヨーク市のクーパーズ・ユニオン公会堂でGFIの旗揚げを大々的にやつただけに結果は寝耳に水という感じだつた。新市長

は二八歳の法律家で、ホームレス対策には冷淡だといわれている。いつたい、アメリカでは国家の成立の経緯から言って、歴史的に「貧困は個人の問題」という考え方が強いが、彼は明らかにそうした声を代表しており、改めて一筋縄ではいかない問題の根深さを思い知らされた。ひとつの事実も視覚を変えれば見え方がちがう。

それはそれとして、GFIの初期のプロジェクトはおよそ次のようであつた。誰にでもわかるようにとの考えから、アメリカ人にはよく親しまれているフランク・バウムの童話「オットズの魔法使い」を借用してこのプロジェクトは「イエロー・ブリック・ロード」と名称された。一種の幸福追求物語だが、主人公たちが協力して艱難辛苦をのりこえていく過程で、自分たちがめいめい本来すばらしいものを持つていてこと気に気づいていくストーリーだ。禅でよく使われ

る「十牛図」に似ていなくもない。

母子ホームレスのばあい、小さな子供を連れているがために職業機会はおろか、一定の技術を習得する場まで奪われていることが多く、専従スタッフやボランティアの人々が子供の養・教育（地蔵ケアと呼ばれる）にあたる間、母親が職業訓練をうける。母子ホームレスのおよそ

の平均年齢が母親二四歳、子供六歳と言われることからもわかるように、右のような措置はどうしても必要な処方だといえる。また成人男子のホームレスについては収容者数が前者よりも少ないが、彼等のホームレスになつた原因が、アルコール依存・ドラッグ常用・怠惰などにあることが多いため、正しい生活態度の習得に力点がおかれる。また、収容者だけではなく地域住民にも施設の一部を開放し、カフエテリアの併設が考えられていた。さらに音楽・木工芸術・人形劇・写真・書道・文章訓練などが地域住民

の文化的向上のために予定されており、各分野の指導にはゼンに心をよせる人々があたることになつていた。ハプシコード奏者のアトニー・ニューマン、冒險家ジヤーナリストのピーター・マシスン、詩人のアレン・ギンズバーグといえば日本でも彼等の名を知る人は少なくあるまい。

けつきよく、ホームレスのための生活指導の場はしばらくお預けということになつたが、職業訓練の方はG.F.I発足前後から少しづつ始まつた。器具の名称、使い方から実際のベーキングの技術、製品の梱包、発送にいたるまでの、およそこの種の業務に関する一切のプロセスを段階を追つてすべて体験学習させようとするのである。ひと通りの過程を終えると本人の希望しだいで、そのまま従業員として働くことも、他のベーカリーで働くことも可能ということだつた。八九年には業務が拡大し、昼夜一交替制

カリグラフィ

をとるようになり、大半は黒人の若い男女で占められていた。

前の計画が頓挫した後もホームレス・プロジェクトは続行され、八八年にはベーカリーと一緒に存するかたちで新たに營利集団として建築と一般事務部門を設置した。ここでもそれぞれの職種のノウハウを訓練、習得することによって、各人が経済的に自立し、市民としての役割を果たすようになるべく期待されている。いずれもプロジェクトに加わりながら職業技術を学ぶといふもので、建築部門であればレンガ工・大工・配管・電気配線・設計等の訓練が含まれるし、事務部門では秘書・簿記・コンピューター操作などがその内容になる。生計には二つの部門が加わったことになるが、これは母体となるZCNYメンバーに帰属するものではない。ZCNYもひとつの機関として、これらの総合体をヘグレイストン・グループと彼等は呼んでいる。



ホームレスの家族を収容する施設

昨年（一九八九）九月には連邦政府の援助をうけて、ベーカリーからさほど遠くない場所に旧廃校に替わる建物を購入し、その改築には同グループの建築部門の人々があたっていた。これは成人ホームレスの職業訓練と就職の場である。

このプロジェクト全体は地域の他のキリスト教教会や民間の専門家、一般市民ならびに連邦、州、郡、市といった行政機関の支持によつて成り立つてゐるわけだが、これだけ広範囲の協力を得られるのは、これまで見てきたようにひとつにはプロジェクト自体のユニークさにあるといえよう。ホームレスといえばシエルター（一時救護所）、生活保護といった単純的な考え方になるべく避けられているようにおもう。

もつとも、ホームレスの職業から生活習慣、はては彼等の住む地域社会にまで目をむけようとするZCNYのソーシャル・アクションは、

見ようによつては画餅であるかもしない。まことに気の遠くなるような、息のながい多大の労苦を必要とする試みだからである。だが、問題の大きさと深さゆえほとんど頭をかかえている行政機関にとつては、小都市ヤンカースの宗教グループを中心とする大胆な試みが、解決をみるさいのひとつのケース・スタディと映つてゐることもたしかなようだ。行政側からの資金援助の増大のようすがその期待のありようを裏づけている。

V

以上がZCNYの掲げる「曼陀羅」の概略である。だが曼陀羅に「胎蔵界」と「金剛界」があるように、ZCNY曼陀羅の各要素にも、表裏の関係があるだろう。たとえば「^{ライブリーフッド}生計」には表の面として拡大・富裕、裏面にはみせびらかし・自己への耽溺がつねに僅かの距離できび

すを接している。同じように「^{スタディ}学習」には開放性・明晰性に対して知的虚偽・人の知見の独占、「坐禪」にはダイナミックな中心性・静寂に対して、無関心と放心、「超宗派」には慈愛・安寧に対しして愛着・とらわれ、「^{ソーシャル・クンショナル}社会福祉活動」には慈悲・友愛に対して画一化・全体主義など、何を列挙してもいいがいずれも言うところの方便である。要は彼等のそして、さらにいえばわれわれのひとりひとりがこれをどう捉えていくかにあるといつてよからう。

(一九九〇、五、十三)